母と語る（1）

三倉惣橋

○ことしはまだ、可愛いゝ子ども達のために、充分いゝお正月を與えることが、むつかしいかも知れない。がそれは、餅の小さいことです。お菓子の甘くないことです。玩具の少ないことです。つまり物の不自由なことで、心で補えば補えることである。また、是非、心で補わなければならぬことである。あなたの心で。

○氣の毒なのは、なんにも知らず敗戰にあつた子ども達である。がしかし、家庭があり、親があることに變りはない。その家庭が燒かれ、その親を失つた子らに至つては、氣の毒などの言葉ではつくせないほど、同情の限りであり、能う限りの愛護をつくさなければならないが、それを思いやるにつけても、あなたの家庭をあなた自身を、あなたのお子さんの幸福のために大切にしなければなりますまい。家庭と親とを、眞に子どもの幸福のためのものであらしめることは、必ずしも物において充ち足らせるばかりではない。ゆうまでもなく、心において充ち足らせることである。それは物において普通の世でもそうである。が、物に缺くる日、殊に心が大切になる。

○幼い子どもは、物さえ充分なら滿足するもの、物のよろこびしか知らないものと、假りにも思つたら大間違いである。あの純な、こまやかな人間性は、或は、おとななんかよりも一層純に、一層こまやかに、心の幸福を感じるものである。備つている部屋も好きだ。しかし、それが自分のための心を籠められている時、どんなに嬉しいであろう。貰うものはなんでも喜ぶとゆうが、それが自分のためのやさしい心と、その心のあふれる笑顔とを以て與えられる時、どんなに嬉しいであろう。子ども達を人間として侮つてはならぬ。樂しませ、喜ばせるだけでなく、眞に心を嬉しがらせなければいけない。眞に心を嬉しくさせるのは心のほかにない。

○愛護とゆうが、子どもの心を嬉しくすることなしに、どんな愛護も出發しない。家庭にあつて特にそうだ。幼い子に對して特にそうだ。そうして、それが、家庭にあつて、親において、最もよく、最も自然に出來ることである。教育とゆうことも亦、この基礎なしにはあり得まい。殊に、家庭教育は、それを特色とし、本質とする教育である。教育者としての親の工夫も力も。

○それにしても、理屈は兎も角、眞に心を嬉しくされた時の、子どものあの嬉しさは、なんと、親にとつて嬉しいことであろう。その嬉しさがまた、子どもにとつても、どんなに嬉しいことであろう。こうした嬉しさの循かんに充ちてこそ、お子さんの家庭、あなたの家庭である。

新春初めの言葉として、先づこれをお母さん方に贈る。